

軍国主義の桜観と本居宣長に関する批判的研究

キーワード：桜、本居宣長、軍国主義、ものあわれ、大和心

社会学部人間心理学科 糸井琴美

(指導教員：黒崎輝人)

目的

軍国主義を経て桜は死と結び付けられるようになった。古代から時代ごとに桜観を見ていくことで、その背景を考察する。また、宣長の思想は軍国主義に利用されたが、その経緯や背景を知ると同時に、宣長自身はどのような気持ちを込めて「敷島のやまごころを人間はば朝日に匂ふ山桜ばな」の歌を詠ったのかということに迫る。

1 古代から近世までの桜観

古くから愛されてきた桜に対して人々が抱くイメージは、各時代において様々であった。また、古代に年中行事として始まった花見は、平安時代には貴族らによって優雅さを、安土桃山時代には秀吉によって豪華さを加えられ、江戸時代で庶民に広がった。

2 桜と軍国主義 — 散り際の桜 —

アヘン戦争と黒船来航の衝撃から始まった日本の近代化は軍国主義化を必然とし、戦争に協力的な国民を育成するために、政府は教育の中に桜を取り入れる。また、軍歌の「同期の桜」が流行したことで、戦争で亡くなる兵士と散り際の桜を重ねる風潮が出てくる。

一方で、大正や昭和初期に著された萩原朔太郎や梶井基次郎の作品を見てみると、散り際の桜に人間の死を重ねてはいない。梶井が書いた小説の中の「櫻の樹の下には屍體が埋まってある！」という有名な一節は、衝撃的な印象を人々に与えた故にその一節のみが知れわたっているが、続きを読むと、桜の美しさに嫉妬したからこそ彼は逆説的な文章を書いたのだと見て取れる。

しかし、特攻隊を考案したとされる大西瀧治郎が、その作戦の中で宣長の「敷島の」の歌や桜に関連することを採用したことで、軍国主義と宣長・桜の結びつきは強くなっていく。

3 桜と本居宣長

出生が桜の名所・吉野にある水分(みくまり)神社と関係している宣長は、24歳の頃に桜を好み始める。国学を研究し、ものあわれについて持論を展開していく中で日本人の精神に迫った宣長は、自身の還暦を記念した自画自賛像に「敷島の」の歌を書き添えた。日本精神

の象徴は、朝日に映える山桜のような麗しさ、そしてその美しさを五感で感じるところにあり、散り際の桜に見出されるものではない。

宣長の思想は、軍国主義やその元となるものとは異なっていた。宣長の思想の礎である「ものあはれ」は、暴力や力、死とは相容れないものであった。また、桜観においても宣長は桜を死の象徴とは結び付けずに、五感で感じたままの美しさ、桜を見たときにただ綺麗だと思う「みやび」を真髄であるとしていた。「敷島の」の歌は、宣長のものあわれ観の表出である。桜を愛し、日本を愛した宣長が行き着いたのは、朝日に映える山桜の美しさ、麗しさこそが大和心であるということだった。

考察

「敷島の」の歌は、軍国主義を経て多くの人々に曲解されるようになったということが確認された。また、そのような曲解をされるに至ったのは、特攻隊を考案した大西瀧治郎が、最初の特攻部隊の名称を宣長の「敷島の」の歌から採り、「敷島隊」「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」とつけたことが契機だと考えられる。そしてその背景には、その頃すでに桜が散り際の美しさを象徴するものとして認識されていたという事実があり、宣長と軍国主義の結びつきは戦後まで受け継がれた。

主な参考文献

- ・大貫恵美子『ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義』岩波書店、2003年。
- ・山田孝雄『櫻史』櫻書房、1941年。
- ・小川和佑『桜の文学史』朝日新聞社、1991年。
- ・萩原朔太郎『萩原朔太郎全集』第一巻・第二巻 新潮社、1959年。
- ・梶井基次郎『檸檬』武蔵野書院、1931年。
- ・小林秀雄『本居宣長』新潮社、1979年。
- ・相良亨『本居宣長』東京大学出版会、1978年。
- ・石川淳『日本の名著 21 本居宣長』中央公論社、1970年。